資料№.９

令和５年度神奈川県社会教育委員連絡協議会地区研究会（寒川町会場）報告概要

１　テーマ　　社会教育でめざす「ひとづくり・つながりづくり・まちづくり」
２　目　的　　県内各市町村の社会教育委員が一堂に会し、それぞれの地域での取組や社会教育の今日的課題について研究協議・情報交換することにより、資質の向上を図る。
３　主　催　　神奈川県社会教育委員連絡協議会
４　主　管　　寒川町社会教育委員会議
５　日　時　　令和６年２月 15 日（木）13:00～15:50
６　会　場　　寒川町民センター　ホール
　　寒川町宮山 165
７　参加者　　123 名（社会教育委員 85 人、
　　県市町村担当者 35 人、来賓３人）

８　日　程

＜アトラクション＞
司会進行　　寒川町社会教育委員　　堀　洋己
「アーバン・スポーツの魅力発信！BMX フリースタイル・フラットランド種目試技」
BMX プロライダー　　田圓　尚人

＜式典＞

開会の言葉	寒川町社会教育委員会議　議長	森　和彦
主催者挨拶	神奈川県社会教育委員連絡協議会会長	小池　茂子
会場地挨拶	寒川町教育委員会教育長	大川　勝徳
来賓祝辞	神奈川県教育委員会教育局生涯学習課長	信太　雄一郎
来賓	湘南三浦教育事務所所長	北村　一将

＜人権講話＞
「不登校・ひきこもりの悩み―地域でつながる・よりそう・認め合う」
279smile 湘南　運営メンバー

＜事例発表①公民館部会＞
司会進行　　寒川町社会教育委員　　平本　正子
「すべての世代が集う公民館をめざして」
寒川町社会教育委員　山口　明伸
寒川町社会教育委員　小林　くみ
寒川町社会教育委員　森　和彦

＜事例発表②図書館部会＞
「本が大好きな寒川の子どもたちを育てるために～総合図書館を拠点とした子どもの読書活動支援～」
寒川町社会教育委員　倉本　佳子
寒川町社会教育委員　大野　郁子
寒川町社会教育委員　仲田　政一

＜質疑応答＞

＜閉会＞　　寒川町社会教育委員　　仲田　政一

９　発表内容

（１）アトラクション「アーバン・スポーツの魅力発信！」

寒川町からのアトラクションとして、アーバン・スポーツとして近年注目を集めているBMX フリースタイル・フラットランドの紹介を行いました。私たちが暮らす街を舞台とするアーバン・スポーツは、BMX やスケートボード、スポーツクライミングなど、順位を争うより、自らが楽しみ、仲間や観る人たちも一体となって「楽しむこと」を優先することが特徴のスポーツです。寒川町では、2019 年にアーバン・スポーツの世界大会である「ARK LEAGUE 2019 IN SAMUKAWA」を行政、町民、企業とのパートナーシップのもと開催しました。BMX フラットランド、スケートボード、ブレイキンの３つの競技の世界大会が行われ、国内外から２万５千人の観客が寒川町を訪れました。これを契機にスケートボード・BMX フラットランド専用の屋内型練習場「THE PARK SAMUKAWA」が寒川町倉見地区に誕生し、日本でも数少ない室内コンクリート・パークとして、国内外で活躍する選手たちの練習施設かつ初心者でも基本から学べる場として利用されています。

寒川町にはこのようなアーバン・スポーツの拠点があることから、今回は「THE PARK SAMUKAWA」の運営にも携わり、国内大会での優勝経験もある BMX フラットランドのプロライダー田圓尚人選手をお招きし、実演と BMX の特徴やルールの解説をしていただきました。フラットランド種目は平らな場所で BMX を使って、トリックといわれるスピンや一輪で走行するなどの技を使うパフォーマンス性の高い競技です。初めてご覧になる方も多かったと思われますが、トリックが決まったら拍手や声援で讃えるという鑑賞スタイルの説明が事前にあったため、軽快な音楽にあわせて田圓選手が繰り出す難易度の高いトリックに客席から大きな拍手と声援が上がっていました。短い時間ではありましたが、アーバン・スポーツの醍醐味である選手と鑑賞者が一体となる「楽しみ方」を体感していただけたのではないでしょうか。

（２）人権講話「不登校・ひきこもりの悩み―地域でつながる・よりそう・認め合う」

寒川町内で不登校の悩みを抱える子どもやその家族を支援する活動を行っている民間団体 279smile 湘南の運営メンバーにご登壇いただき、こどもの不登校をテーマにお話しいただきました。今回は県内の社会教育委員が多く集まる機会であり、地域や学校で子どもたちに関わる活動に携わっている方も多くいることから、不登校について正しく理解していただき、悩みを抱えた子どもや保護者を地域の大人として優しく見守っていただきたいということで、不登校とはどのような状況であるのかや、不登校の子どもとその家族の現状、会の活動について語っていただきました。

まず、不登校とは単純に「学校が嫌いだから」ではなく、無理や我慢を重ねて登校しているうちに限界を迎えてしまうこと、通えない理由や背景は 100 人の子がいれば 100 通りの状況があることを理解しておく必要があり、不登校の子どもと同じ数だけ、悩みを抱えて苦しんでいる保護者がいるという言葉には、不登校は子どもだけの支援ではなく、悩んでいる保護者にも寄り添う必要もあることに気づかされました。そして、不登校の子ども達は義務教育が終わると学校教育からの支援が外れて支援が届きにくくなるため、成人期のひきこもりにつながらないように、早い段階で様々な専門性の観点から評価して、途切れない支援を提供することが必要となります。家族への支援はとても重要で、不登校に関する考えが合わずに夫婦関係が悪化したり、親族と疎遠になるケースも多く、家庭内での理解が得られないと次の支援段階に進めなくなることから、279smile 湘南では保護者が

安心して子どもを支えられる状況を作ることや、子どもには家の外の安心して過ごせる居場所でいろいろな人と関われる機会を作る活動に取り組まれています。

結成初期から行っている茶話会は、悩みを抱える保護者が横のつながりを作って、孤立せず様々な情報を得てもらったり、不登校への理解を深めてもらう場づくりを行われています。また、不登校により学校からの情報が得にくくなることから、会では不登校に関する情報や季節の出来事をメールやLINEで発信しています。保護者には必要な情報が届くことで、孤立感を和らげる支えとなっています。子どもに向けては、無理なくつながれて楽しい気持ちになれるものとして、誕生日とクリスマスに手書きでカードを贈る活動を行っており、家の外に出られなくても、地域にあなたのことを思っている人がいるということが子どもに伝わることを大切にしながら、信頼関係を結ぶ工夫が感じられました。そして、親子で自由に過ごせる「遊びとおしゃべりの会」は、まず親に参加してもらい、その雰囲気を家で子どもに話してもらうことで、子どもの参加するハードルが下がるケースも多いとのことで、安心できる場所が家の外にもあることが心の支えにつながっていることを紹介していただきました。

活動を続ける中で見えてきたことは、子どもがやりたいことを引き出して主体的に関われる場が必要であり、子どもの成長には学校以外で学べることや、学ぶべきことはたくさんあり、そんな子どもたちのやる気をサポートすること、そして悩みを抱えている子どもや保護者の支えとなる存在を目指して、今後も活動を続けていくことが語られました。

最後に社会教育委員に向けて、地域のいろいろな場面で子どもたちに関わる機会も多いと思われることから、不登校の子どものそれぞれの主体性を認めてあげてほしいこと、子どもや保護者から「あんな大人になりたいな」と思ってもらえるような方と出会える地域の場が子どもたちの心の居場所になり、笑顔でたくさんの人とつながることができるので、ぜひご協力をお願いしたいとのメッセージをいただきました。

（３）事例発表①公民館部会「すべての世代が集う公民館をめざして」

寒川町では平成29年度に公民館と図書館に指定管理者制度を導入して管理運営を行っていることから、外部評価や地域のニーズを取り入れた社会教育施設の在り方を検討するため、社会教育委員会議の内部に公民館部会、図書館部会を設けて活動しています。今回の地区研究会ではそれぞれの部会から事例発表を行いました。

公民館部会による事例発表は、「すべての世代が集う公民館をめざして」をテーマに、公民館が身近な学習拠点としての役割を果たし、人々がつながるために必要とされていることについて検討しました。かねてより地域コミュニティの衰退や社会的孤立が課題とされていましたが、令和2年から拡大した新型コロナウイルス感染症の問題は、社会環境の急激な変化や、生活行動の制限を強いられるなど、これまで想定していなかった状況に誰もが対応しなければならなくなりました。

寒川町の公民館も令和2年度に利用が大きく落ち込んだことから、公民館利用者満足度調査や公民館講座参加者アンケート結果から利用者層の分析をしたところ、令和2年度の定期利用者の81.7%が女性、年代別では70歳以上が66.1%、講座参加者も67%が女性で、年代は70歳以上が54%であることがわかりました。公民館にはシニア世代の女性の利用は多くありますが、男性と働き盛り世代・子育て世代が少ないことがこの2つのアンケートの結果から明らかとなりました。人生100年時代が到来し、誰もが生涯学習社会の

実現をめざす必要があるとされておりますが、公民館利用の実状としては、利用者の性別、年代に偏りがあることから、あらゆる世代に公民館への関心を高めてもらうための取り組みについて検討しました。

まず、アンケート結果から公民館を利用しない世代は学生、勤労世代、定年退職後世代のとくに男性であり、その原因として公民館の存在を知られていない、知るための情報発信が足りないのではないかとの意見から、公民館を利用していない人へのアプローチ方法として、①公民館を知ってもらう、②公民館に来てもらう、③公民館活動に参加してもらう、④公民館活動を継続してもらう、との提案が出されました。

まず、「①公民館を知ってもらう」では、現在公民館に来ている人がどのようなところで情報を得ているのか、講座参加者アンケート結果から分析したところ、圧倒的に広報誌やポスターなどの紙媒体であり、ホームページなどの電子媒体で知る人は1%と非常に低いことがわかりました。しかし、認知度は低くても昨今の情報化社会ではタイムリーな情報を発信することも重要であることから、電子媒体のほかに、紙媒体での発信として社会教育委員からの発案で毎年４月に公民館活動の写真や年間予定などを掲載した公民館利用ガイドも発行しています。「②公民館に来てもらう」では、まず公民館の存在を知ってもらうことが重要で、築40年以上が経過し老朽化している公民館は移転も検討されており、来てもらいやすい施設としてアクセスのしやすさのほか、駐車場やコミュニティバスの利便性、そして単に稼働率だけで考えない公民館施設の在り方や環境づくりが必要と見ています。「③公民館活動に参加してもらう」では、男性の利用を増やすために、もっと男性に特化した内容や募集方法の工夫、親子事業など子育て世代の男性が参加しやすい魅力的な講座づくりが重要であると考えます。また、申込がしやすいようにインターネットからの申込フォームやLINEでの情報発信を開始したところ、新たな利用者獲得につながる効果が出ました。「④公民館活動を継続してもらう」ためには、サークルの育成、支援を充実させる必要があり、毎年２回「サークル入会体験フェスタ」を実施していますが、サークルへの新規加入者はあまり多くありません。また、サークル会員が減少している根本的原因を考えたところ、公民館活動・サークルの認知が低いこと、サークルへ入ることは面倒という気持ちがあること、サークル側には新しい人を入れたくないという気持ちがあることの３つの課題が考えられ、既存サークルの活性化は難しい様子が見えてきました。こうしたことから、サークルに参加することは面倒という気持ちより、地域に仲間がいて楽しい、健康や生きがいを感じるというメリットに注目してもらうための工夫が必要ではないかとの意見が出ました。

このような課題を踏まえ、講座づくりや周知及び申込方法の工夫を行ったところ、令和３年度以降の公民館利用は回復傾向となりました。コロナ禍を契機に公民館を利用していた既存サークルの退会も増えましたが、同じくらいの数の新たなサークル登録があり、これには公民館講座をきっかけにサークル化につながった団体も多いことがわかりました。魅力的な公民館講座が人をつなげ、継続的に学びにつながる成果が出ています。ただし、男性の利用促進については、あまり効果が見られず、さらなる取組が必要であるとの結果が見えてきました。

まとめとして、公民館の現状把握、課題探求、改善策の検討を行いましたが、公民館が地域の学びの拠点として、現在利用が少ない男性や若い世代の地域活動への参加や仲間づくりのきっかけをつくっていくことが重要となっています。これからもすべての世代が地域で活発に活動できる公民館を目指してまいります。

（４）事例発表②図書館部会「本が大好きな寒川の子どもたちを育てるために～総合図書館を拠点とした子どもの読書活動支援～」

図書館部会の事例発表は、子どもたちが本に親しむために、町や図書館、地域で何ができるか、何をすべきかなどについて、平成 30 年度から令和３年度まで部会で協議した内容と、コロナ禍での事業の中止、縮小を経て、令和４年度から活動が再開した現在の状況も含めて発表しました。

子どもの読書活動は、言葉を学び、感性を磨き、表現を高め、想像力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けるうえで欠くことのできないものです。しかし、近年はパソコンやスマートフォン等の普及により、あらゆる分野の多様な情報に触れることが簡単になったことで、子どもの読書離れが深刻となっています。そこで部会では、本が大好きな寒川の子どもたちを育てるために、①家庭教育の向上に資するため、一体となって子どもの読書活動を推進すること、②学校や地域と連携すること、③子どもたちが読書を楽しみ、資料を活用した調べ学習に取り組むことなどを通して、子どもたちの豊かな学びを応援する図書館を目指すことの３つの前提条件をあげて協議を行いました。その背景には、家庭教育では多様化する家庭環境に対して地域全体での家庭教育の支援、社会教育では地域社会の持続的発展のための学びの推進、学校教育では読書活動の推進があるとし、どのような取り組みができるか検討しました。

はじめに、家庭教育については、子どもたちが図書館へ足を運ぶ機会つくりに注目しました。幼少期から親子で本に親しむことで、家庭教育は充実し、読書習慣の定着や図書館利用につながることから、本の魅力を伝える活動が重要となります。そのため、多様化する家庭環境にあわせて、未就学児や大人への図書館に来館する機会が増えるように毎週土曜日のおはなし会や絵本の企画展示などのイベントは効果的です。そして図書館で来館者を待つだけでなく、子育て支援センターへ出向くなど、図書館の外で本の魅力を伝えるアウトリーチ活動も重要であると考えます。

社会教育では、地域社会の持続的発展のための学びを充実、推進させるため、図書館の子どもを対象の読書推進イベント「図書館まつり」と「わくわく読書マラソン」の事例を紹介しました。図書館まつりは平成 30 年度に初めて開催し、館内で様々な展示やものづくり体験などを楽しむことができるイベントです。令和 2、3 年度はコロナ禍のため中止しましたが、令和 4 年度に再開し、通常の土日来館者の約 2 倍の来館がありました。わくわく読書マラソンは、夏休みの子どもの読書を支える活動で、読書習慣定着につなげるために対象は小学生だけでなく、全年齢を対象にしてはどうかという意見も出ました。なお、図書館の認知や利用の促進は現在の取組で足りているか注視することも必要です。子どもたちが本に親しむ機会となる読み聞かせ活動は、家庭教育では０歳児ブックスタート、社会教育では図書館や公民館でのおはなし会、学校教育では小学校での保護者や地域のボランティアなどで行われています。社会教育における課題としては、読み聞かせボランティアの育成があり、図書館が中心となってボランティアの育成を促進する取組が必要であると考えます。

学校教育では、小学校での読み聞かせや中学校での朝の読書活動で多くの本と出会うことで、自主的に図書館に行くことへつなげてほしいところですが、今は調べ学習もタブレットで調べる形になりつつあります。辞書を開くと他の言葉も覚えられるように、本で調べることの良さを体験することも大切であるため、学校図書館の活性化も課題ではありま

すが、司書教諭や読書指導員、図書委員が連携して図書に親しむ工夫の充実のほか、総合図書館の分室にするといった発想の転換も必要ではないかという意見もありました。

寒川総合図書館のジュニア司書制度は、小学校高学年から中学生を対象に養成講座を行い、図書館を利用しているだけでは見えない役割や司書の仕事を理解し、読書推進のリーダー役として地域で活躍してくれることを目的としています。ジュニア司書は４つの講座と２つの実習を修了後に認定され、定期的な活動としておすすめ本の展示や図書館イベントの運営補助などに参加しています。ジュニア司書が本を選び、紹介ポップづくりをして展示をした本や、選書会に参加して購入資料の絞り込みに携わって選書した本は貸出状況が良く、ジュニア司書効果が出ています。

このような活動を総合的に振り返ると、今後充実すべき４つの発展的改善点も見えてきました。①町民が身に付けた知識や経験を活かせるよう図書館ボランティアの育成、②子どもの読書活動支援、充実のための学校図書館との連携、③図書館が学習活動や情報発信の機能を高め、活動の充実を図るための地域の多様な主体との連携・協働、④図書館の利用促進を図るための図書館講座の開催が必要であると考えます。部会で出された様々な意見は、現実的には実行が難しいものもありますが、今後の総合図書館の事業計画に反映されていくことを期待するとともに、また私たち社会教育委員としては家庭・地域社会・学校をつなぐコーディネーターとしての自覚をもって取組を続けてまいります。

10　まとめ

今回の地区研究会のプログラムを検討する中、社会教育委員からアトラクションについて寒川町が積極的に支援をしているアーバン・スポーツの BMX はどうだろうかという提案があり、BMX フラットランドのプロライダー田圓選手に出演を依頼しました。翌週に世界大会を控える時期で、なおかつベニヤ板をガムテープでつなげた簡易的な舞台、通常は２人組で行う説明と実技を１人で行わなければならないという状況下でありながらも、「言い訳せずに、どこでもできるのがプロです」との心強い言葉をいただき、リハーサルで難易度の高いトリックに取り組む真摯な姿勢と本番ではしっかりと大技を成功させるところにプロの矜持が感じられました。

人権講話は、子どもの人権、地域とのつながりという視点から、町内で不登校支援の活動を続けている民間団体の 279smile 湘南に講師を依頼しました。不登校は学校と家庭だけの問題と捉えがちですが、悩みを抱える子どもの成長を見守り、保護者の支えとなるような居場所をつくることは、社会教育活動として関われることがたくさんあるという気づきをいただきました。私たちは地域の大人として、子どもの主体性を育み、多様性を認めること、不登校を正しく理解すること、温かく見守ることの大切さを認識しました。

事例発表では、社会教育委員会議の公民館部会と図書館部会で過去に協議してきた内容から地域の課題に着目し、あらためて発表に向けて掘り下げて検討してきました。公民館利用者の高齢化・固定化の課題や利用者拡大に向けた方策と分析には自分の地域でも同じ課題を抱えているとの共感や、昨今の読書離れに対して子どもの読書活動推進の取組やジュニア司書活動は参考になった等、終了後のアンケートでもたくさんご意見、ご感想をいただき、概ね好評であったことは大変嬉しく、今後の活動の励みになりました。